

# 西夏文法華経と西夏語の研究

——ロシア・米国所蔵資料にもとづいて——

荒川慎太郎

はじめに

二〇一八年十一月、米国プリンストン大学図書館が所蔵する西夏文「妙法蓮華経」（以降、法華経）に関する初の研究書、『プリンストン大学図書館所蔵西夏文妙法蓮華経』（以降、荒川二〇一八b）が刊行された。文献学的解題、言語学的研究、西夏文全文の録文・訳注・索引、そして何より、美麗なカラー印刷で、仏画を含む原文全頁を公開できたことが喜ばしい。

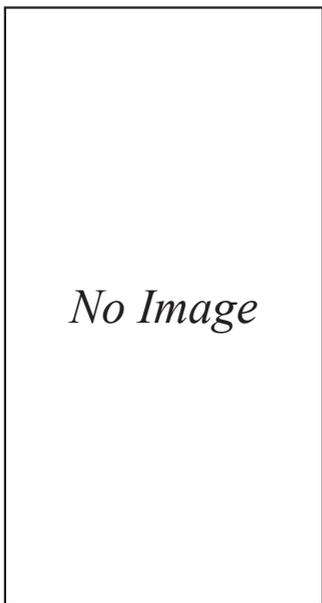


図1 プリンストン本本文冒頭  
(荒川二〇一八b図版編より)

西夏文法華經については、二〇〇五年、『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華經」写真版（鳩摩羅什訳対照）』（以降、西田編二〇〇五）の公刊によって、ロシア東洋古文書研究所所蔵品の全貌が明らかになった。

本稿ではプリンストン所蔵法華經「刊本」とロシア所蔵「写本・刊本」との相違、プリンストン本に特徴的な仏図の紹介、西夏文法華經を利用した言語学的研究について述べたい。

## 西夏国と法華經

法華經は初期大乘仏教を代表する經典の一つであり、漢語をはじめ東アジアの多くの言語に翻訳され、読み継がれてきた。西夏でも鳩摩羅什漢訳法華經とそれをもとにした西夏訳が流布していたことが、カラホトからの出土品によって明らかになる。西夏における法華經の詳細については西田二〇〇五a、二〇一二も参照して欲しい。ここでは、西夏時代の法華經の認識について、拙著（荒川二〇一四：三三四）から紹介した

い。それは十二世紀に成立した西夏の法律書『天盛旧改新定禁令』卷十一に見られるものである。まず拙訳を示す。傍線と【中略】などは筆者が加え、（ ）内に語句を補った。

僧（衆・救）法が為す、寺舎（にて）修める門

### 【中略】

一品、西夏・チベット（族）の頌・經典を（誦）誦すべき（もの）は『仁王国を護る（『護国』）』『文殊眞実（の）名』『普賢行願品』『三十五仏』『聖仏母』『国を守護する（『守護国』）吉祥頌』『世音を観る（『觀世音』）普門品』『竭陀般若』『仏頂尊勝最も持つ（『總持』）』『垢無き（『無垢』）浄光』『金剛般若』頌と全て

一品、漢（族）の頌・經典を（誦）誦すべき（もの）は『仁王国を護る（『護国』）』『普賢行願品』『三十五仏』『国を守護する（『守護国』）吉祥頌』『仏頂尊勝最も持つ（『總持』）』『聖仏母』『大供順』『世音を観る（『觀世音』）普門品』『孔雀經典』『大発願頌』『釈迦讚』

この部分に、西夏で重宝される仏典が、時に略称で記される。法華経そのものはないものの、原文に二度、薩陀毘羅藏「世音を観る普門品」とある。明らかに「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」を指す。現存する西夏版「普門品」は絵入り刊本、扉絵を持つものも多く、サイズも携帯に適したものである。<sup>(3)</sup>民間レベルでの法華経の流通もうかがわせる事例といえよう。法華経は当時の西夏において広く知られ、また重要な経典であったことが同時代資料からもわかる。

西夏文法華経——ロシア所蔵品と米国プリンストン大学所蔵品の相関

米国プリンストン大学東アジア図書館 (Princeton East Asian Library and the Gest Collection) (図2、<sup>3</sup>) は八十三点の敦煌文書を所蔵する。<sup>(4)</sup>その中の西夏語文献は量的に決して多いとはいえないものの、保存状況も良好で貴重な資料も含まれている。西夏語文献は大きく三種、すなわち

1. Peald (=Princeton East Asian Library,

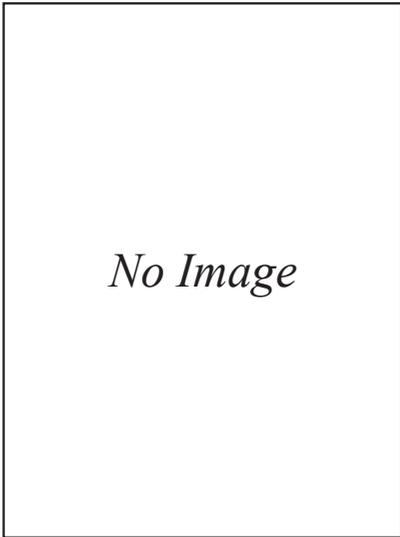


図3 プリンストン大学東アジア図書館の入る建物

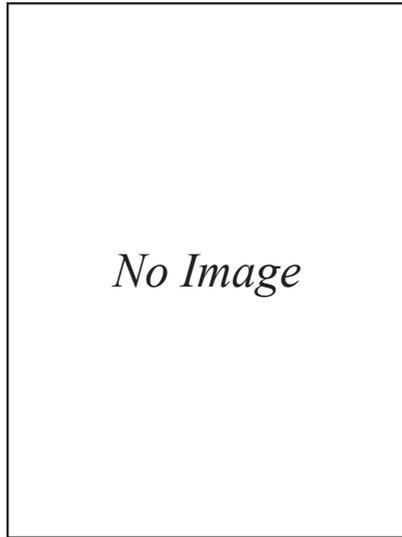


図2 プリンストン大学東アジア図書館

Dunhuang)の番号を持つ諸断片

2、刊本西夏文『大方広仏華嚴經』(以下華嚴經)卷

七十七

3、刊本西夏文法華經卷四(以下、プリンストン本)

からなる。1、2は荒川二〇一一、二〇一二で詳しく論じた。

刊本・折本の西夏文法華經卷四が完全な形で残る。

木刻本であり、一折六行、一行十六字詰。縦三三・三三×横一〇・七センチメートルの、やや大型の版本。仏画を含めて計一〇三折が残る。法華經「五百弟子受記品第八」から「見宝塔品第十一」が全て含まれ、完全に残る。西田編二〇〇五・四三・六六に掲載される図版で分かるように、比較的残存部の多いロシア所蔵法華經卷四でさえ、九十折である(「見宝塔品第十一」後半を欠く)ため、プリンストン本は現時点で確認できる最も完備した法華經卷四といえる。<sup>(5)</sup>

プリンストン本と比較できる巻四を持つロシア本は、「西夏文編号二一七」の旧番号六三三号、六四号、二二一七号、三九〇〇号の四点である。残存する部分

で異同を調べると、異なる箇所は非常に少ないもの存在する(たとえば「由旬」の西夏語音写が、プリンストン本: 𐽀eu: 𐽀swyin、ロシア本: 𐽀eu: 𐽀swi: など)。しかし漢文法華經との差異より、西夏文異本間の差異の方が小さく、西夏文諸本は同一の訳本からの派生と考えられる。<sup>(6)</sup>

#### プリンストン大学所蔵品仏図について

プリンストン本は次のような構成で残る。まず四折分の仏図扉絵、榜題状の裝飾枠内帝号三折分、経題、序、本文(図1)、経題である。本節ではプリンストン本に特徴的な仏図について紹介する。

ロシア所蔵西夏文法華經の扉として知られる仏図は何点か現存する。ただし、「法華經卷一から七の主要なエピソードの絵の集成」であり、どの巻の冒頭の扉ともなりうる、いわば「汎用」の仏図である。一方、プリンストン本の仏図は、「巻四」に含まれる四品の内容と合致する図像であり、いわば「巻四専用」である。じつはロシア所蔵、「漢文」法華經仏図には、各

巻の内容を反映したものがあり、「巻四」に先立つ仏図(図4、上段)も現存する。しかし、プリンストン本の図と比較すると、「分量が二折分と短い」「図像がモチーフに共通するものはあるものの、全体に図像が少ない」「短冊の形で、内容の説明が書かれることがない」など、簡素であることがわかる。

一方、プリンストン本仏図(図4、中段)は、次のような特徴を備えているために、貴重な資料といえる。

・四折分を余すところなく図像に利用しているので、各品のエピソードが多く含まれる

・縦型・横型の、多数の短冊で図の説明が書かれており、図だけでなく、文章からも内容を把握することができる

・短冊の西夏文は、法華経本文と内容が共通するも、表現が異なることも多く、「同一内容の簡潔な表現」を観察するのに適当な材料となる

しかし、

・エピソードや短冊が直線的に配置されていないため、順序の把握が困難である

・西夏文が本文より小さい文字で、しかも端の方は若干摩滅しているため、判読が難しい  
・表現が簡潔すぎるため、時に文意がつかみにくいという、扱いの難しい部分もある。

次に本図において、短冊がどのように配されているか、それがどのようにグルーピングできるか示したい(図4、下段)。便宜上、漢数字を持たない短冊を「0」とする。

一 四折目の短冊と図像は、

0. 二折目上部の、数字の無い短冊…巻四全体の内容にかかる(大きな釈迦図の上に位置する)

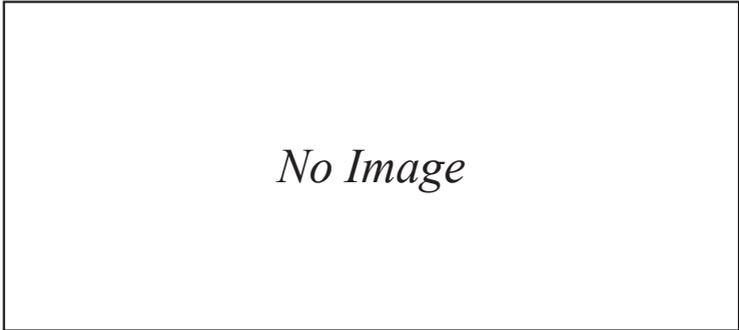
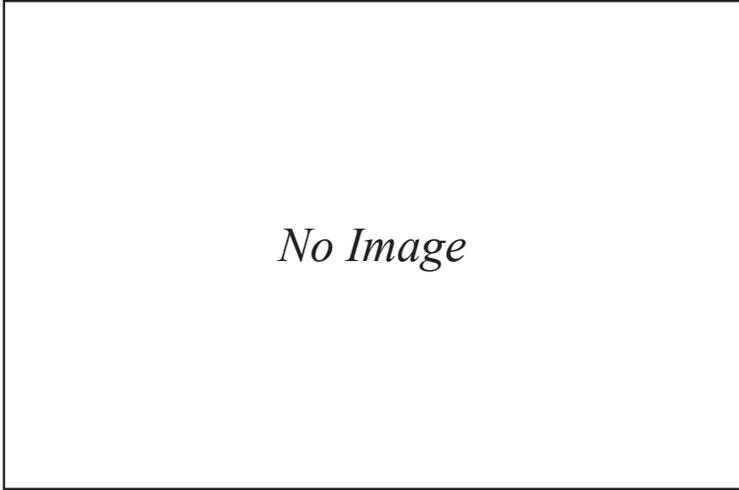
1. 一 三折目の、上一 六…「五百弟子受記品第八」にあるエピソード

2. 一 三折目の、中一 五…「授学・無学人記品第九」にあるエピソード

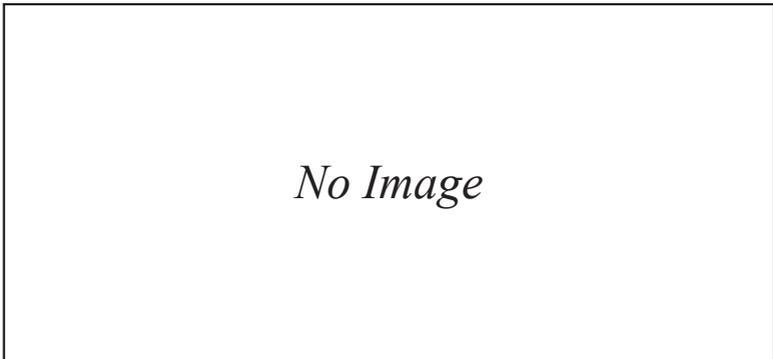
3. 一 三折目の、下一 五…「法師品第十」にあるエピソード

4. 三 四折目の、上一 九…「見宝塔品第十一」に

図4 上段は黒水城出土漢文法華經仏図、中段はプリンストン本仏図、下段はそのトレース



仏図と各漢数字の位置 ↓



トレースは蔵西氏による

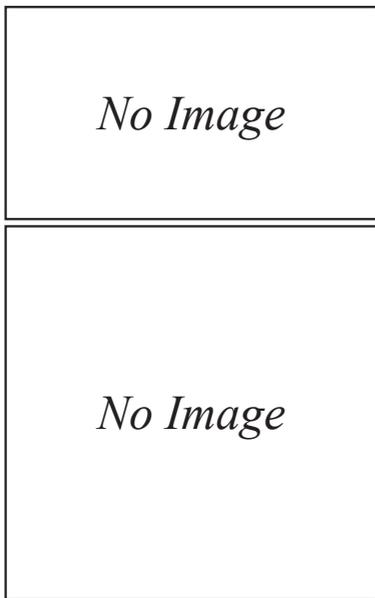
あるエピソード

の五つに大別できる。

凶像とエピソードの一部を、西夏語の拙訳とともに説明を試みたい。仏図の右上には、漢数字で「上五」「上六」と書かれた短冊がある(図5)。その中の西夏文を抄訳する。

「眠って(宝珠を)探さない(という)因縁に入る」

図5 プリンストン本仏図拡大  
(荒川二〇一八b研究編より)



「多く貧窮の苦を受けて後、小さな聖に向かい、またその優れた種を損わず仏のもとで記を得る」

仏図右上、室内で眠っている人物とその左横にいる人物が描かれる。寝ている人物の衣に宝珠を縫い込むという、「法華七喻」の一つ「衣裏繫珠<sup>えりけいじゅ</sup>」のシーンである。左横に屈む人物は丸い珠を有するようにも見える。中段右上には、杖をついた貧者と左に相對する人物。「衣裏繫珠」の話の後段、貧者として彷徨う友人に、真実を説く親友が左に立つ場面と思われる。

### 西夏文法華經を用いた西夏語の研究

西夏語は一〇三八〜一二二七年、中国西北部に覇を唱えた西夏国の言語である。西夏文字による大量の文献、主に仏典が残る。西夏滅亡後も西夏文字・西夏語は使われていたが、十六世紀の記録を最後に途絶えた。言語系統はチベット・ビルマ語派に属するものの、直系の後裔言語は確認されていない。地域的には同語派でほぼ最北端に位置する。

文法的には、「主語・目的語・動詞」、「指示代名

詞・名詞・形容詞」の語順であること、必要に応じて格標識（日本語のテニヲハに相当する）が使用されることが、動作の方向・完了ほかを示す接頭辞、人称接尾辞などが動詞に付加され、時に複雑な動詞句構造をとることが知られる。

西夏語の先行研究では、人称代名詞の独立形（および複数標識）と動詞に後続する人称接尾辞の間に「呼応」現象が確認できることが指摘されてきた。日本語で例えると「私、彼に話す私」のように、一見冗長な言語表現となる。人称代名詞と接尾辞の文字と推定音を示すと次のようになる。

	人称代名詞	人称接尾辞
1人称	𐰽 𐰺nga	𐰽 𐰺nga
2人称	𐰽 𐰺ni:	𐰽 𐰺na:
3人称	𐰽 𐰺tha:	無し
複数	(代名詞・名詞)- 𐰽 𐰺ni:	𐰽 𐰺ni:

プリンストン本においても、人称代名詞の独立形、人称接尾辞、それらの共起が頻出する。

(1) 𐰽 𐰺𐰽  
 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽  
 私常これの法受人間最上第一(人)受  
 私は常に、この法を説く人の間で最上であると  
 いい《私は》(五百弟子受記品)

(2) 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽  
 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽 𐰽 𐰺𐰽  
 私達 仏の 功德 説 否定辞 できる 複数接尾辞  
 私たちは仏の功德を説くことはできない《私は  
 ちは》(五百弟子受記品)

(1) で見たような「人称代名詞と人称接尾辞の呼応」は、漢語やチベット語に対応する現象・要素が見られないため、翻訳仏典を扱う際注意が必要である(例えば、(1)の文末の人称接尾辞を人称代名詞の独立形と誤ると、「私」が、後続する文の主語であるように誤ることになる)。

こうした「人称代名詞の呼応」とは別に、西夏語に





また、例文は省略するものの、

大衆は、二仏如来が七宝塔の中の獅子座の上に結跏し座すを見て（見宝塔品）……

という個所では、仏と如来の「二人」が行為者であるにも関わらず、双数接尾辞が現れない。

先に述べたように、これらの文は会話文ではなく「地の文」であるため双数接辞が出現しない訳であるが、直後の会話文、「私たち」を主語とする文にも双数接辞が現れない。これは会話文全体が短く、行為者が誰かわかりやすいためと考えられる。

現在話者のいる言語であれば、「二人の人物を行為者とする文」を作文し、動詞の語尾を調査するのは難しいことではない。しかし文献しか残らない言語において、適当な例文を探すことは意外と難しい。例えば仏典においては「善男善女」「比丘比丘尼」は「双数」ではなく、「善男（たちと）善女（たち）」「比丘（たちと）比丘尼（たち）」という「複数」であるなど、内容を理解した上での「数の認定」が必要となるためである。

### おわりに

筆者による、プリンストン大学図書館所蔵西夏文献の調査は十年前に遡る。西夏文華嚴経卷七七と仏典諸断片は比較的すみやかにテキスト化と訳出を終え、二〇一一年と二〇一二年に公刊できた。しかし、私事ながら東日本大震災で実家が被災し、法華経卷四に関しては中断の憂き目にあつた。その後雑事に追われ、プリンストン本法華経の研究書の刊行まで八年近くかかってしまった。この間、西田龍雄先生、庄垣内正弘先生、エヴゲーニイ・クチャーノフ先生ら学恩深い先生方が逝去され、同書をご高覧いただくことが叶わなかった。深くお詫びするとともにこれまでのご指導に深くお礼申し上げます。

また同書の刊行は、プリンストン大学、東洋哲学研究所の皆さまをはじめ、多くの方々のご協力あつたものである。一人ひとりお名前を挙げるのは差し控えるが、深くお礼申し上げます。

No Image

No Image

図6 『ロシア科学アカデミー東洋学研究所  
サントペテルブルク支部所蔵西夏文「妙  
法蓮華經」』

図7 『プリンストン大学図書館所蔵西夏文妙法蓮華經』

注

- (1) ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク支部は改組され、二〇〇七年、ロシア東洋古文書研究所となった。なお研究所名の和訳は「東方文献研究所」「東洋写本研究所」などもされるが、『東洋学術研究』の既刊に従って、本稿では「東洋古文書研究所」とする。
- (2) 卷十一の原文影印は『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黑水城文獻』（以降『俄藏』）八、二四四―二四五頁などに挙がる。
- (3) 現時点で刊本十点、写本一点が確認できる。これらの図版は『俄藏』二十三、三〇―三二六頁に掲載される。
- (4) 収蔵の経緯と所蔵品の概観については Bullitt 1989, Hejdra 2010, 2017 参照。
- (5) 西田編二〇〇五においては、二三二七号（刊本）が鮮明なカラー図版で公刊されている（図6）。その事実上の研究編は西田二〇〇五a、二〇〇五b、二〇〇六a、二〇〇六bの四編であり、加筆修正を加えたものが西田二〇一二に再収録されている。
- (6) 荒川二〇一八b（図7）のテキスト編では、プリンストン本と漢訳の間、プリンストン本とロシア各本の間で、確認できた全ての異同を注に示しているので、詳しくはこちらを参照されたい。
- (7) 図版は『俄藏』一、三三三頁参照。

(8) 以降の例は、西夏文原文・荒川による推定音・逐語

訳・和訳からなる。言語学の論文になれない読者には煩瑣ではあるが、漢語とは発音も文法も異なる西夏語をよりよく知っていただきたいがためである。原文で主語に二重線、動詞に一、人称接尾辞に波線を付した。

(9) 下線、和訳、出典表記〔法華六〕は『法華経』第六巻を示すは西田による。例文の出典箇所、原文は西田編二〇〇五・一一八、一五一にある。

参考文献

荒川慎太郎「プリンストン大学所蔵西夏文華嚴経巻七十七 訳注」『アジア・アフリカ言語文化研究』第八十一巻、二〇一一年、一四七―三〇五頁

——「プリンストン大学所蔵西夏文仏典断片 (Peald) に つらつ」『アジア・アフリカ言語文化研究』第八十三巻、二〇一二年、五三―六頁

——『西夏文金剛経の研究』松香堂、二〇一四年

——「西夏語の双数接尾辞について」林徹ほか編『ユーラシア諸言語の多様性と動態』ユーラシア言語研究センターシム、二〇一八年a、六九―八三頁

——『プリンストン大学図書館所蔵西夏文妙法蓮華経——写真版及びテキストの研究』創価学会・東洋哲学研究所、二〇一八年b

Bullitt, Judith Ogden, "Princeton's Manuscript Fragments from Tun-huang," *The Gest Library Journal*, Vol. 3, No.

1-2, 1989: 7-29.

西田龍雄編『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華経」写真版(鳩摩羅什訳対照)』IOS RAS・創価学会、二〇〇五年

西田龍雄「西夏語研究と法華経(Ⅰ)」『東洋学術研究』第四十四巻第一号、二〇〇五年a、一三六―二〇九頁

——「西夏語研究と法華経(Ⅱ)」『東洋学術研究』第四十四巻第二号、二〇〇五年b、二一六―一九二頁

——「西夏語研究と法華経(Ⅲ)」——西夏文字写本と刊本(刻本と活字本)について『東洋学術研究』第四十五巻第一号、二〇〇六年a、二七二―三三三頁

——「西夏語研究と法華経(Ⅳ)」——西夏文字の基本構造と双生字編『東洋学術研究』第四十五巻第二号、二〇〇六年b、二四七―二〇八頁

——『西夏語研究新論』松香堂、二〇一二年

Martin J. Heijdra, "The East Asian Library and the Gest Collection at Princeton University," *Collecting Asia: East Asian Libraries in North America, 1868-2008* (Peter

X. Zhou ed), Ann Arbor, Michigan: Association for Asian Studies, Inc. 2010. 121-135.

——"Cataloging Chinese rare books at Princeton - A history." 普林斯顿大学东亚图书馆編『普林斯顿大学图书馆藏中文善本書目』(全二册)北京、新華書店、二〇一七年、一一―三頁

図録

俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所・中國社會科學院民族研究所・上海古籍出版社編『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黑水城文獻』一、八、上海、上海古籍出版社、一九九六、一九九八年

俄羅斯科學院東方文獻研究所・中國社會科學院民族學與人類學研究所・上海古籍出版社編『俄藏黑水城文獻』二二三（第二十三卷主編史金波・魏同賢・E・I・克恰諾夫）、上海、上海古籍出版社、二〇一四年

（あらかわ しんたろう／東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所准教授）